

2022年度 学校評価報告書（アクションプラン 兼 学校自己評価）

アクションプラン						学校自己評価		
						A：達成度が高い B：概ね達成している C：課題を残している D：速やかな改善が必要である		
分掌・委員会	項目	目標・課題	アクション	評価方法（定量的）	優先度 （高・中・低）	今年度評価 （A～D）	今年度の成果・到達度	次年度に向けての課題とアクション
入試広報部	受験生・入学生の確保	・ 中学、高校共に各コースで定員充足率100%越えを目指す。	・ 学外関連機関及び学習塾などからヒヤリングし情報収集・分析を行う。 ・ 各コースの特徴を明確に伝え、受験者数を増加させる。 ・ 塾訪問機会を増加させ、生徒(児童)1人を出願、受験、入学となるように追いかけていく。 ・ 塾との連携を強め、特定の塾対象のプレテスト、説明会、学校見学会等を実施する。 ・ 個別指導塾への訪問頻度を上げる。	出願者数、受験者数、入学者数の過年度比較、推移を確認する。	高	B	出願者数について、中学入試では微減、高校入試では減少した。中学入試については、昨年度大幅増ということもあり、その反動から来ている自然な現象で、一昨年も増加していることから大事には至っていない。高校入試は、すみれ奨学生の出願が新たに始まったこと、合格目安基準のアンダーラインを少し上げたことと、奈良県全体の中学生の実力テストの平均点が下降した事が相まって、出願者数が減少したと捉えている。	中学入試については、奈良県の公立中高一貫校のの人氣が上昇していることから、受験率は高まってくる時期に入ると考える。MYPの学びと学校の特色をしっかりと打ち出していきたい。高校入試に関しては、すみれ小学生の出願が始まったことから、II類の印象が変わってくる可能性があり、単なる特進クラスのような打ち出し方では本末転倒で、目的からズレる。研究を目的に、総合型選抜で国立公立大学や海外大学へ進学する生徒を育てるという教育方針を発信する必要がある。
入試広報部	入試業務の成功	・ 業務をできるだけ簡素化し、ミスのない入試業務の行う。	・ 入試に関する物品や会場等の準備を行う。 ・ 入試当日の人員配置や運営を行う。 ・ 受験生の答案や成績処理に関わる運営を行う。	入試当日のトラブルの有無、問い合わせ件数を確認する。	高	A	トラブルもなく円滑に入試を終える事ができた。しかし、作問に関する事で、作問ミスが2回（中学C日程国語、高校社会）あった。また、中学適性検査型入試の外部委託に関することは今後の懸念点だ。	作問の外部委託に関して、慎重に業者選定をすることが必要である。
入試広報部	効果的な広報活動	・ 本校の教育活動の認知度を高める。 ・ MYPの授業や探究的な授業の認知度を高める。 ・ 学校の魅力を効果的に発信する。	・ 校外での広報活動の頻度強化し、奈良県のみならず、大阪及び京都へも広報活動を広げる。 ・ MYPの授業や探究的な授業の見学できる機会をつくり、保護者、生徒（児童）及び塾関係者の認知度を高める。 ・ 生徒実行委員会と連携し、オープンスクール等の行事を通し学校の魅力を外部へ発信する。 ・ ホームページ、SNS等のインターネットを利用したツールを効果的に用いて発信する。	オープンスクール等の入試広報イベント参加者数の過年度比較、過回比較、推移を確認する。	高	B	オープンスクール、入試説明会とも人数限定で行った。参加者数は昨年並みか少し減少している。特に、高校の第3回入試説明会が100組にも満たなかった。	開催曜日を基本的に土曜日としていたが、日曜日開催を考える。また、ホームページだけの告知ではなく、SNSを利用したものを加えていきたい。しかしながら、SNSやHP専属の業務担当者がいない。次年度は担当をお願いしたい。
渉外担当部	効果的な渉外活動	・ 本校独自の取り組みや教育内容を外部に発信し、学校の認知度と魅力を広める	・ 学習塾、中学校を訪問し、学校の魅力を伝える ・ 塾関係者を対象とした学校説明会を実施する	・ 年間の塾・中学校訪問件数を確認する ・ 塾対象の説明会参加者人数を過年度比較する	高	A	例年通りの塾訪問を行った。中学校訪問は夏休みに行った。新しい入試制度の説明にはかなりの時間を要した。	高校入試の出願者を増やすには、中学校訪問の機会を増やす事が必要だと考える。
MYP推進委員会	組織	再認定に向けての課題改善を組織的に行う。	委員会での業務改善案を考え、学校運営に反映させる。	学校教育アンケートの評価を見て重点項目が改善されたかを確認する。	高	B	・ 推進委員のメンバーの先生方を中心に「ATLスキルを高める授業」とは何かを考え各授業で実践していただいた。 ・ スキルの札・グローバルな文脈をビジュアル化して掲示した。	札の作成にとどまらず、授業での実践を進化させることが必要。 ・ ATLスキル以外の重点項目にも取り組みきたい。
MYP推進委員会	教育内容	各教科の連携をさらに深められるよう縦・横の連携を深める。	年間の授業計画などを組織で活用する。	学校教育アンケートの評価を見て重点項目が改善されたかを確認する。	高	C	・ 教科における縦横の関係は推進委員会の中では実施することができた。各教科の実践や指導の方法などを意見交換することができた。	全体で共有するためには、全体が活用できるアイテムを稼働させるか、時間の共有を増やしていく。
MYP推進委員会	保護者連携	保護者等にIBの活動・教育内容を理解を深めてもらう。	通信の発行・保護者会などでの説明	学校教育アンケートの評価を見て重点項目が改善されたかを確認する。	高	B	・ 可能な限りのIB通信の発行と、HPの作成は実施した。 ・ 新入生保護者説明会で評価に関するの説明をした。	・ 生徒の課題提出に対する保護者のご理解を頂き、その提出率の向上に努めたい。 ・ よりよく知識の定着を促すような仕掛けを引き続き考え、実施していく。
高校改革推進委員会	保護者連携	保護者等に、高校での授業の様子や評価方法について理解をしてもらう。	説明会の実施	学校評価アンケートの内容より、意見の集約	高	B	年度当初に保護者に対しての説明会を行った。しかし、1回だけの説明会だけでは理解していただくのが難しく面談等で担任が何度も説明することで徐々に理解していただいた。	保護者への説明会は年2回程度必要と考える。また、今年度同様、担任からの説明は面談等で必要と考える。
高校改革推進委員会	教育内容	生徒の授業への取り組み方や振り返りなど、学習の進め方の情報を発信する。	HR等を活用しての説明会の実施 日々の担任や教科担当者からの説明	学期ごとの授業評価	高	B	生徒が効果的に学習に取り組む方法を教務と連携しながら行った。学習スケジュールを立てながら課題に取り組む生徒が増えた。ただ、学習において振り返る場面が少なく、生徒自身が自分の力の伸びている部分やこれから伸ばしたい部分についてなどの振り返りを考える時間がなかった。	教科内もしくはHRにおいて、単元や学期終了時点での学習の振り返りを行うサイクルを構築する。
高校改革推進委員会	教育改善	学習や評価について、現状の問題点の確認・改善案の提案	週1回の会議で、現状の問題点を確認し改善案を出す	学期ごとの授業評価	高	C	高校1年生の授業や評価について検討した。また、改善が必要となった場合は改善案を出し教員への発信を行った。評価方法については今後も検討が必要であり、教務とも連携をしながら今後も進めていく必要がある。	高校の学習と評価について引き続き検討と改善案の提示を行う。
ICT委員会	組織	ICTを業務に活用し教員への負担軽減につなげる	研修などで方法などの共有	ICT活用状況のアンケートの実施（学期ごと）	高	C	Classiやyourmarkなど頻度が高いものはよいが、部分的なものは共有できていない。達成度50%。	精査する。
ICT委員会	教育内容	導入アプリなど精査	教員・生徒へのアンケート調査	アンケートを実施し、使用状況を調査する。	高	C	アンケートをとる余裕がない。達成度30%。	アンケート内容を絞る。
ICT委員会	教育内容	学習アプリを導入し、生徒の基礎学力の向上につなげる	中学校：Monoxerの導入 高校：Classiの機能の使用	学習状況と模試の成果と比較検討	高	C	一部の先生、一部の機能しか使えていない。達成度40%。	わからない。
生徒指導部	生徒たちと信頼関係を強くする	生徒たちと対話・コミュニケーションの時間を増やす	従来通りの仕事を削減し、イノベーションする	生徒たちと接することができた時間30%増	高	C	50% 9人中5人が達成していると思われる。	仕事の効率化をもっと図るべき。チェックや管理をする時間を省き、生徒と接する時間を増やすべき。
企画広報部	学校情報の発信	積極的な情報発信 学校新聞などにより、積極的に情報を発信していく。	学期ごとの学校新聞の発行 積極的な生徒の参画を促す	発行の確認 参画した生徒数	高	B	滞りなく学校新聞発行ができた。	学校行事の時期が買っているので、記事内容の再検討が必要。
企画広報部	行事授業等の公開	感染症対策をしっかりと行い、学校行事や授業を保護者や場合によっては地域への公開を行う	保護者や地域の人に可能な限り広報して、本校の活動を知ってもらう。 ICTの活用。	学校行事や授業参観などの参加人数の推移を確認	高	B	コロナ禍に比べると、年度末にかけて来校者も増やすことができた。	来校していただく行事とオンラインで参加してもらう行事を整理する。
企画広報部	育西会との連携	保護者との連携を密にして学校への理解を深めてもらう	役員会・委員会・保護者会を通じて、相互理解をはかり、日々の教育活動に生かす。	行事・保護者説明会等の参加人数の推移	高	B	密に連絡をとり、スムーズに話し合いが進んだ。	体育行事や文化行事などのかかわり方を再検討していく。
教務部	教育（中学）	共通理解と協働体制	Unit Planner・Subject overviewの振り返り・改善	授業実施についてのアンケート	高	B	授業を担当していないものに共通理解できていないところがある。	I Bの定められた内容がきちんとできているかを確認しながら進められるようにする。
教務部	教育（高校）	共通理解と協働体制	評価の運用とフィードバックと改善	各学期後の評価の振り返り	高	B	授業を担当していないものにはまだ理解してもらっていないところがある。	課題内容や評価方法を全体に周知できるようにする。
教務部	ICT教育	適性な活用と活性化	教員研修の開催・定期的な活用法の共有	各学期後のアンケート	高	B	アプリなど、使用に偏りがあり精選する必要がある。新しい成績システムの運用ではまだまだ円滑になるまでは時間を要する。	成績処理システムの円滑かつ安定化は継続的に進めていかなければならない。

2022年度 学校評価報告書（アクションプラン 兼 学校自己評価）

アクションプラン						学校自己評価		
						A：達成度が高い B：概ね達成している C：課題を残している D：速やかな改善が必要である		
分掌・委員会	項目	目標・課題	アクション	評価方法（定量的）	優先度 （高・中・低）	今年度評価 （A～D）	今年度の成果・到達度	次年度に向けての課題とアクション
教務部	授業力アップ	公開授業実施	学期ごとの教科内研究授業・授業公開	公開授業後のアンケートの集計	高	A	多数の外部の方を招くことができた。アンケートにも具体的に答えていただくことができ、有意義なものになった。	一部の学年、クラスだけにとどまっていたので、次年度にはどの学年クラスがよいかの検討が必要である。
進路指導部	中学生の基礎学力の充実	積み重ねの教科である英語・数学に関し、高校入学後困らない程度の学力を担保する。第3回学力推移調査における全国偏差値を立命館コースで50、特設コースで45を目指す。	中学3年間の流れの構築と成績の推移のモニタリング	内部進学者のⅡ類進学者を10名以上にする	中	B	Ⅱ類進学者8名 放課後補習の充実	模試で結果を出す
進路指導部	国公立大学進学者を増やす	Ⅱ類卒業生の50％以上が国公立大学へ進学	何年生のどの時期にどのような施策を打つかについて、3年間の流れを作る	国公立大学進学者数	高	B	国公立大学合格者14名（Ⅱ類卒業生の1/3強） 進路シラバスの策定	進路シラバスの実行
進路指導部	進路に関する情報発信の強化	全教員および全生徒が進路情報にアクセスする手段を整備し、生徒が主体的に進路に関わる行動を起こす。	様々なアセスメントの結果の利用 学外からもたらされる情報の共有	校内で共有される記事の数	中	B	模試の結果については一定程度の共有がなされた	進路事務職員がスケジュールに従って模試結果の配信を行う
高大連携部	協定大学との連携	現状より、協定大学との連携を強化する。	生徒の大学訪問企画・運営、模擬講義等への参加	実施後の生徒アンケート	高	C	・昨年度実績のあった大学様への訪問に加え、近畿大学、龍谷大学へ訪問させていた だいた。 ・関西大学の土曜講座に2・3年生を中心に10名程度参加した。	・大学訪問時の本校卒業生との連携 ・各大学から提示される講座（講義）への積極的参加
高大連携部	指定校推薦	学びたいもの・学びへの意欲・熱意を持った生徒の育成	日常の学びの中に、進路を意識した取り組みを入れる。	授業アンケート	高	D	大学との連携という視点での意識した取り組みができていない。	日ごろの学習成果と連携大学が提示する講座（講義）との関連性を積極的に見だし、生徒に提示していく。
立命館コース担当部	理系誘導	立命館コースにおける理系進学者の数を40％まで増やす。	短期的には、理系女子の社会的なニーズを保護者・生徒に周知する。 長期的には、中学を含む早い学年から理系への興味関心を高める	理系学部進学率35％。及び理工学部への進学者3名以上	高	C	理系学部への進学は昨年度より改善したが、目標とする40％に満たず、理工学部への進学も2名に留まった。	地道ではあるが、低学年から理系誘導を継続していく。
立命館コース担当部	業務整理	立命館コースの業務の保存	立命館進学にかかわる面談資料・書類・説明会などの資料を整理し、新しく担当した教員の指導指針となるものを体系的に残す	各種資料の保存	高	B	本年度の活動をもとに、進路シラバスを作成し次年度の進路指導に活用することとした。	推薦順位を決めるファイルの運用を進路事務に任せられるようにする
事務部	経費管理の適正化	物件費の計画的な予算執行	本校の教育活動に応じた予算執行の見直しを図る。	部門別決算において黒字化の継続。	高	A	適正な部門別予算を計画し、予算執行につなげた。予算業務プロセスの徹底を図ることができた。	業務効率化のため、消耗品等の購入については、2学期末までの予算執行率を高める必要がある。
事務部	老朽化設備の更新	生徒用ロッカーの改修工事	夏休み期間に1・2号館廊下に設置されている生徒用ロッカーの補修工事を行う。	期間内での改修工事の完了ならびに予算管理を徹底する。	高	C	コロナ禍のため資材の調達に時間を要し、完工時期が大幅に遅延した。	今後、當額計画を策定する際、資材・商品の調達時期を含め工事時期・期間を策定する必要がある。
事務部	事務効率化の推進	ペーパーレス化の推進	連絡アプリの有効活用（生徒保護者向け文書、育西会発信文書等） ミライコンパスの有効活用（入試業務における各種文書の送付等）	発信文書について、前年度からのペーパーレス化の進捗を把握する。	高	B	育西会の案内・アンケート、就学支援金、授業料軽減補助金関連の保護者向け文書のデジタル化を図った。	ミライコンパスの機能を活用し、高校入試の中学校宛合否通知のデジタル化を検討する。
組織運営	コンプライアンス	教職員の時代に合った社会的な規範意識（価値観・倫理観）を育成する。	日頃からの注意喚起に加え、年間2回のコンプライアンス研修を実施する。	教職員からコンプライアンスに関わる苦情等の報告・相談件数（教職員数の1割に相当する8件以下を目標）	高	C	コンプライアンスに関して、WellBeingチームおよび衛生委員会から提案いただいた研修が行われた。年に複数回実施したが、同内容での実施で、参加は各教員1回となった。教職員からのコンプライアンスに関わる報告・相談の件数は多数あり、まだ目標に達しているとはいいがたい。	衛生院会からの研修だけでなく、本校独自に状況に合わせた研修を設定する。教員間のコミュニケーションを促進することで、ストレスや思い違いなどを減らし、苦情に至るケースを減らしていく。
組織運営	学校経営計画	教育理念・教育目標・教育方針を基に教育の質の向上を目標とする。	日頃からアクションプランを意識し、教育活動にあたよう管理・指導する。	学校自己評価のBランク以上に到達したアクションの割合（90％以上を目標）	中	C	アクションプランは年度の始めに立て、学期の始めや終わりに振り返りをしているが、日頃から各教員が意識することはできていない。自己評価も低く、意識できていないことが見て取れる。	アクションを具体的な取り組みにしていき、日頃から意識的に全教員が取り組めるものにしていく。